

地方出版
情報誌

アクセス

毎月1回	1日発行
購読料	定価 150円 (本体 143円)
年間	1,500円(税込み)
振替	00120-0-19017

発行所 (株)地方・小出版流通センター
編集 アクセス編集委員会

〒162-0836 東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355 FAX.03-3235-6182

第24回 梓会出版文化賞 特別賞受賞にあたって 地方で出版の仕事をするということ

桂書房の場合

文・勝山敏一

特別賞の桂書房は富山市で出版活動を行っておられ、一九八三年に創立されました。この出版社は、人文科学関係の本を主として刊行されてきましたが、中には一九九三年に刊行され、版を重ねてきた『納棺夫日記』のような小説もあります。この青木新門著の小説は著者の葬式の現場での体験に基づいて書かれたものですが、二〇〇六年に添削加筆して定本が刊行され、映画「おくりびと」の原作となりました。こうした出版物もありますが、桂書房は地方出版という枠を超えて意欲的な出版に取り組み、二〇〇八年には二十数年にわたって会社から報復イジメを受け退職間際にやっと訴訟に踏み切った串岡弘昭氏の『「トナミ運輸」内部告発・裁判全記録』や石仏の多産さ・芸術性などをガイドしながら信仰の現在性を、レイアウトにも工夫して表現し、散策に持参する本としては異例の論文収録を行った尾田武雄著『とやまの石仏たち』や明治初期の文献資料によって活版師を描いた勝山敏一著『活版師はるかなり』なども刊行されています。いずれも大部で重い内容の本を刊行されている活動を評価し特別賞を授与しました。(以上、同賞選考委員・植田康夫氏の選考のこぼり引用)



支払えた本でしたでしょうか。兵事係をしていた方が、敗戦時の焼却命令に背いて赤紙など資料の数々を床下に隠匿、公表されたのは三十年も過ぎてでした。誰にも言わずたった一人、資料を守れたのは、ここに戦争の真実があるという思いが消えなかったから、そう仰いました。出征していった村人の魂がこもっている記録、何十種類ものこれら書類に万分の一でもウソ偽りがあってはいけない、兵事係も必死の思いで個人情報を集め記録したのだという、そういう真実です。血や涙と共にあった戦争の記憶が、やがて歳月とともに風化していくのを見、どのように資料を白日の下に晒せばいいのか、その方は苦悶されたようです。まっすぐに受け止めてくれる人もいようが、有名になりたいだけなのだとか曲解する人もいるだろうという苦悶。

彼の思いを吐露してもらい、著名な歴史学者をお願いして作った本ですが、すぐに私の苦悶も始まりました。地元では有名な右翼の方から詰問状がきたのです。赤紙作成に際して情実が存在したかのよう(帯やチラシの惹句)本を売り出し、あの聖なる戦争をお前は汚すのか、という内容。どんな真実と思われることも、それは万人にとって真実なのではないと知らされました。自分に幾分の思い上がりのあったことを悟りました。

取り上げねばならない問題は名乗りをあげた者が責任を持たねばならない

出版の仕事地方でさせてもらうには代償を払わねばと、ずっと思ってきました。周縁に追いやられている問題を取り上げることです。東京ならいざ知らず、地方の読者数は出版社が何社も並び立てるほど多くありません。誰かが出版社の名乗りをあげれば誰かの可能性が消えることとなります。売れそうになくても、取り上げねばならない問題は名乗りをあげた者が責任を持たねばならない、そういう思いです。

地方出版は昭和四十年代に全国各地でいっせいに起こりました。私のように昭和五十年代に始めたものは第二世代です。私から見て第一世代の出版はやりたい放題に見えました。先駆けたものはその僥倖に自覚的であればならないのに、と少し批判的になってい



受賞挨拶する桂書房・勝山敏一氏

ました。第二世代だから持った視点かもしれない。スタートして幾人かの方から「私も出版の仕事をしたかった。だが、あなたが始めてしまったから…」と聞かされました。これでいいのか、いつも私はその方々に照らされているような思いでいます。

スタートして五年後(一九八八年)に発刊の『村と戦争』が最初に代償を

地域に根ざそうとしていればやがて多様な真実がくっきりと見えてくる

すぐには気づきませんでした。おそらくこれが切っ掛けでした。どんな真実も、たくさんの人に伝えられればいいというものではないのか。ある面からは大きく、ある面からは細々(こまごま)として見える真実というもの、

本当にそれを必要とするのは世界中でも二、三人なのではないか。その人には届けばいい。そうやって地域に根ざそうとしていけばやがて多様な真実がくっきりと見えてくるだろう、そう思うようになったのです。

こんな周縁にいる本屋を取り上げられた審査員の方々にお礼を申し上げます。心細い道を歩んできたものにとりまして、強い支えとなるものです。最後になりましたが、ここまで私どもを育ててくださった読者の皆様、郷土コー

ナーを設けて支援して下さった書店の皆様、全国の読者へ取り次いでくださった地方小出版流通センターの皆様にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

(かつやま・としいち/桂書房代表)

新刊ダイジェスト

※価格は総額(税込)表示です。

『花々の墓標』 ●佐藤亜有子著



“私は作家でなければ通り魔か狂人か、殺人犯になっていただろう”

非常にショッキングな言葉だが、父親から近親姦虐待を受けた著者の悲痛な叫びである。本書は文藝賞優秀作受賞でデビューし、芥川賞候補にもなった作家の自伝小説。この虐待が彼女の人生にいかにか影響を及ぼしたかが、圧倒的な迫力で伝わってくる。自殺を決行する代わりにひとつの小

説を完成させ、治療に専念すべく、クリニックの門を叩き、イメージワークで救いを見出す。似たような傷に苦しむ全ての女性に捧げられ、また加害者には彼らの犠牲者の未来の姿を突き付ける内容であるが、書くことで再生を図った著者の今後に期待したい。解説は精神科医・斎藤学。

◆ 1260円・四六判・150頁・ヘルスワーク協会・東京・2008/11刊・ISBN978-4-904340-00-4

『公共図書館の利用をめぐる評価』 ●藤谷幸弘著



自分の住む街の図書館が閉鎖されたり、サービスが縮小されたとしたらどうだろうか。ロンドン市民のように、猛烈な反対運動に立ち上がるだろうか。気持ちよく読書できる、居心地のよい空間としての図書館を原風景とする著者は、近年の公共図書館計画はマンネリ化し、都市の文化を高めるといふ本来の機能を果たしていないと、歯がゆく感じてきた。そこで、図書館建築計画や地域計

画の専門家としての立場から、公共図書館の社会的、文化的価値を時間的推移で評価する方法論を提唱。国内外の公共図書館を検証し、立地する都市における活字文化の収集と継承が、都市中心図書館の使命であると結論づける。

◆ 2415円・A5判・191頁・あるむ・愛知・2008/12刊・ISBN978-4-86333-004-7

『いたずら子犬 ダーシェンカ』 ●カレル・チャペック著/栗栖茜訳



作者カレル・チャペックは、『ロボット』や『長い長いお医者さんの話』などの作品で知られているチェコの作家、ジャーナリスト。自らイラストを描き、文を書き、写真を撮って、産まれたばかりの子犬が、いたずらっ子に成長する姿を追ったのが本書。チャペックの素人っぽいイラストは、子犬への愛情にあふれていて、生き生きとして本から飛び出してきそう。よちよちしていた赤

ちゃん犬も、成長していき、やがて大人になる。チャペックは、ダーシェンカに生きていくうえの知識を教え語る。まるで、わが子に語るように。1933年に初版されて以来、世界中で愛読されているが、今回新たに翻訳をして出版された。

◆ 1470円・215mm×215mm判・91頁・海山社・東京・2008/12刊・ISBN978-4-904153-02-4

『イエスの涙』 ●ピーター・シャビエル著



十字架を衝動的に燃やしたり、あるいは十字架を見ると吐き気を催したりといった「十字架嫌悪症候群」と呼ばれる不可解な現象が世界中で頻発していた。そんな時日本のカトリック教会に属するある修道女が「十字架嫌悪症候群」の原因に関わるキリストの啓示を受けたという情報がバチカンに届く…。このように物語はエンターテインメント小説の外観を呈して展開し、日

本人修道女が受けた啓示の内容はやがて殺人未遂事件を引き起こし、さらにはバチカンに革命的な事態をもたらすまでにいたる。しかし、モチーフとなっているのはキリスト教信仰の伝統と本質をめぐるきわめて純粹で真摯な思考である。そこが本書の大きな魅力だ。

◆ 1995円・四六判・428頁・アートヴィレッジ・東京・2008/11刊・ISBN978-4-901053-72-3

売行良好書

期間：2009年1月16日～2月15日

【出荷センター扱い】※税込み価格

- (1)『ゆりちかへ』1365円・書肆侃侃房 (2)『作っておくと、便利なおかず』1260円・ベターホーム出版局 (3)『イエスの涙』1995円・アートヴィレッジ (4)『世界でいちばんやさしい料理教室』1365円・ベターホーム出版局 (5)『佐野繁次郎装幀集成』2310円・みずのわ出版 (6)『自然農・栽培の手引き』2100円・南方新社 (7)『公共図書館の利用をめぐる評価』2415円・あるむ (8)『自己信頼 新訳』1260円・海と月社 (9)『鯨取り絵物語』3150円・弦書房 (10)『母系』3150円・青磁社 (11)『鉄道遺産を歩く』2100円・吉備人出版 (12)『神戸の市電と街並み』1575円・トンボ出版 (13)『定本 納棺夫日記』1575円・桂書房 (14)『われら雑草家族』1680円・石風社



【三省堂書店神保町本店4F—センター扱い図書】※税込み価格

- (1)『東京かわら版 2月号』420円・東京かわら版 (2)『北海道いい旅研究室 11』690円・海豹社 (3)『向島墨堤夜話』1365円・海象社 (4)『Bon Appetit 5』550円・Bon Appetit (5)『佐野繁次郎装幀集成』2310円・みずのわ出版 (6)『善光寺御開帳公式ガイドブック』1050円・信濃毎日新聞社 (7)『鉄道遺産を歩く 岡山の国有鉄道』2100円・吉備人出版 (8)『沖縄のおもしろ看板スター』1470円・ボーダーインク (9)『ノグンリ虐殺事件』3150円・寿郎社 (10)『三角屋根の古い家』1995円・編集工房ノア

【ジュンク堂書店新宿店—センター扱い図書】※センター出荷データより/税込み価格

- (1)『広告批評 No. 332』590円・マドラ出版 (2)『北海道いい旅研究室 11』690円・海豹舎 (3)『弘影城の時代 増刊』2000円・本多正一 (4)『酒とつまみ 第11号』400円・大竹編集企画事務所 (5)『親密さの罭』1050円・アスク・ヒューマン・ケア (6)『狂気な作家のつくり方』1575円・本の雑誌社 (7)『愛じゃ！人生をかけて人を愛するのじゃ！』1365円・ホメオパシー出版 (8)『k8 vol. 00』525円・こだま屋 (9)『戦車はミサイルはいつ、どのようにして生まれたのか？』1995円・防衛技術協会 (10)『自然農・栽培の手引き』2100円・南方新社

以下ホームページでも各種情報提供を行っております。ご利用ください。
<http://www.bekkoame.ne.jp/~much/>

トピックス — ★★★

▼『廃村と過疎の風景』第3集入荷

以前この欄で紹介したことがある『廃村と過疎の風景』の第3集が平刊されました(HEYANEKO刊 1575円)。今回は「学校跡を有する廃村」という副題がついており、廃校廃村の旅の記録となっています。写真多数および地図付。巻末には「廃校廃村・高度過疎集落リスト」が付されています。著者の浅原昭生さんが廃村巡礼をはじめのきっかけとなったという当センター扱いの無明舎出版刊『秋田・消えた村の記録』の著者・佐藤晃之輔氏が巻頭文を寄せています。それによりますと山間部を主とする集落の無人化は大きな社会問題でありながら風化しつつあり、全国規模での調査は今のところ進んでいないとのこと。そんな状況の中、十代の頃から廃村を巡り、記録し続ける浅原さんの仕事(趣味?)は途轍もないことなかもしいと思えてきました。

▼『リムジンガン』第3号入荷

『北朝鮮内部からの通信 季刊リムジンガン』の第3号が入荷しました。特集は「金正日『異変発生』後の北朝鮮」。金正日重病説を北朝鮮の民衆がどう受け取ったか、経済官僚秘密インタビュー③「でたらめな政府の経済指導」等々。北朝鮮内部のジャーナリストがレポートした驚くべき記事がたくさん載っていますが、なかでも「シリーズ若者の声 10代女性の本音に迫る」ではファッションや整形などニュース報道では伝わらない若者文化に触れていて実に興味深い内容です。


郵便販売のご注文方法

- ◎お名前、お届け先(郵便番号、住所)、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までFAXでご連絡ください。
- ◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせていただきます。基本的にメール便は、一冊210円でお送り致します。(メール便の到着は、発送してから3～4日かかります。)お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合わせ下さいませ。
- ◎なお書籍お買上総計(税抜き価格)が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせていただきます。

★地方・小出版流通センター

FAX：03-3235-6182

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。



三省堂書店

BOOKS SANSEIDO

神保町本店 4階
地方出版・小出版物フロア

営業時間 10:00 AM～8:00 PM
 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
 TEL. 03-3233-3312(代)
 URL. <http://www.books-sanseido.co.jp>

営業の
ごあんない

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。

